

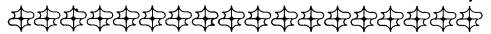


早春旬日記

随 想



川 瀬 正 三 郎



今年は例年になく寒さがきびしいとこぼしながらも、二月の声を聞くと、明らかに三寒四温の現象を呈しながら徐々に暖かくなっていく。空の色も柔らかな青味を帯び、草木の芽も蕾も日増しに膨らんでくる。

二月八日。藁谷君、筑波大学第一群に合格の報もたらす。続いて古和田君も同大学第三群に合格したという。幸先きよき門出である。

春めくや君の合格聞きしより

三月一日。三年間励まし、いっつくしんできた三百六十七名の生徒が巣立って行く。厳粛に挙行される卒業式に臨みながら、過ぎ去りし日のあれやこれ

三月七日。午後より三年生を受持った先生たちと甲府に旅行す。黒磯あたりより梅の花が見られる。塩山市郊外

乾徳山恵林寺に着いた時は、五時を少し過ぎて、庫裡の門はもう閉じていた。夢窓国師の名庭が見られないのが残念である。

梅の香や禅寺の門深く閉ず

三月八日。甲府善光寺の大伽藍をバスの窓より拝し、昇仙峡に行く。豪壮な仙娥の滝のしぶきを受け、溪流巖石の小径を下る。

春寒や巖打つ音の水高く

天神森で再びバスに乗り甲府の市街に下る。鳳凰三山、甲斐駒が岳、北岳等南アルプスの大障壁が、バスのフロントグラス一杯に広がる。曾遊の山々なれば、なつかしさ限りなし。

あいさつを交す峰々雪光る

御坂峠のトンネルを抜けると、河口湖の湖水はるか上空に、富士山が威容を現す。東海道方面より見る姿とまた違って、傾斜の反りの、より大きな北斎の「凱風快晴」に見られるような優美な曲線を描いている。

春光る湖に小舟や大き富士

三月二十一日。お彼岸の中日で、菩提寺を参詣した後、実家へ行く。甥は来月十九日結婚式をあげる予定だが、お祝に一句寄せる。

花の香の溢るるとき幸せを

同僚の阪路裕先生も、この二十九日御結婚されるのはお目出たき限りである。

先がけて幸せの花咲き初むる

三月二十二日。近所の木村、関谷両御夫妻私方夫妻の六人で京都に行く。北野天満宮では、満開の白梅紅梅に酔い痴れ、広隆寺では弥勒菩薩に魅了される。

艶めきて紅梅似合う天満宮

三月二十六日。京都旅行より帰ってみると、新聞に教職員の異動が発表されていた。日ごろ睦みあった先生がたと別れるのは本当に寂しい。行かれる先生がたにつたない句をお贈りする。

別るるを惜しむや関の春の湖

名事務長梅の香りを一身に

(福島県立白河高等学校教諭)